# イルサルトのスーツは 熟練した職人の手により1点1点特注で日本国内で作られています

現在イルサルトでオーダーして頂けるアイテムは、スーツ・ジャケット・パンツ・コート・シャツ・ベルト・靴。オーダーして頂いたお品物は全て日本国内の技術力には定評のあるスーツ・ジャケット・パンツ・コートを縫製する5工房、シャツを縫製する2工房、ベルト・靴を生産する2工房、合計9つの工房で熟練した職人の手により1点1点特注でお作りさせて頂いております。

納期はスーツで約1ヶ月〜1ヶ月半、シャツで約3週間〜1カ月、ベルト、靴で約1カ月半になります。それぞれのアイテムでご注文〜お渡しの流れが異なるのですが、今回はスーツの生産の流れを説明させて頂きたいと思います。

## 1 良いスーツを作るために最も大切な事とは？

良いスーツが出来るのかどうか？最も大切なのは僕の指示の仕方次第なんです（笑）。でもこれは冗談抜きで完全に言い切れる事なんです。と言うのもイルサルトがお世話になっている工房や職人は日本でも指折りの技術力を持つところばかり。もちろん人の手が絡む事なので100%ミスが無いとは言えませんが、限りなくミスは無いに等しい。ボクが指図したイメージ通りに仕上げてくれる生産背景があるからこそ僕も安心して日々お仕事をさせて頂く事が出来ています。

イルサルトは完全予約制のオーダースーツサロンですので、お客様から予約を頂いた瞬間から仕事がスタートします。何百種類もある生地の中からお客様自身が選ばれるのは至難の業。ですので、お客様がご来店くださる前にボクの方でオススメの生地を3〜4種類ピックアップしておきます。

その時に大事にしているのはブランドとかトレンドとかではなくて、お客様のキャラと思いと外見に一貫性のあるスタイリングかどうなのか？です。これはブログ等でも書いている事なのでここでは割愛しますが、お客様に相応しいのか？そのスーツを着たらお客様が理想の自分になりきれるのか？どうかが大切です。

↑イルサルトがお世話になっている工房

そして体型に合わせたサイズ決めをしていく訳ですが、お客様の身体に合わせすぎることはしません。オーダーなんだからお客様の身体に全て合わせて当然でしょ！と思われがちですがボクはそうは思いません。身体の特徴に合わせすぎたスーツはカッコイイとは言えないからです。色々な体型の方がいます。全員が西島秀俊さんみたいな身体であれば身体に合わせてもカッコイイ、でも上島竜平さんの身体に合わせすぎたスーツってカッコイイと思いますか？！？！要はそういう事です（笑）。身体に合わせすぎず、でもシルエットが美しくなるスーツの仕様書をまずはボクの方で完成させ、使用する生地と一緒に工房に生産依頼をかけます。

## 2 まずはスーツの設計図を作る

ボクからの指示書でスーツがすぐに出来上がるわけではありません。イルサルトの指示書を工房用の指示書に変えるところからスーツの生産がスタートします。スーツは袖、背中、胸の様に色々なパーツに分かれているのですが、それぞれの形をどのようにするのかをまず決めます。腕が細い人太い人、なで肩の人いかり肩の人、お尻が大きい人小さい人色々な体型の特徴がありますので、その体型に合わせて各パーツの形を作り上げていきます。これが“型紙作成”や“パターン作成”と呼ばれ、スーツの設計図を作る作業になるのですが、ここが物作りの肝の部分。完成度の高い型紙で作られたスーツはシルエットが非常に美しく仕上がりますので、パーツ一つ一つを慎重に作っていく作業をしながら型紙を作成していきます。

## 3 設計図を元に生地を裁断する

スーツの設計図である型紙が出来上がると次に“生地の裁断”の工程に入っていきます。とは言え、いきなり生地を裁断するわけではなく生地全体にキズやシミ、汚れ等が無いか、スーツを作るのに十分な長さや品質を維持できるだけのクオリティなのかを細かくチェックします。そして次に型崩れを防ぎ生地本来の姿に整形するため、表生地に熱蒸気を吹かして縮械します。そして、一日程陰干しします。スーツ好きの方なら聞いたことがあるかも知れませんが、これが“地のし”と呼ばれる作業です。地のしされた生地は、作成されたスーツの設計図を元に裁断されていきます。

このカッティングは職人の腕が問われる部分、生地によって伸縮性が違ったりする場合も多いので長年の経験から生地の特性を考慮しながら生地をカットしていきます。

↑このようにスーツ生地を陰干しし、整形します

たかだ布の切り方ひとつと思われるかもしれませんが、微妙なカッティングの違いでスーツの出来栄えが左右される非常に大切な工程です。そしてカットされた生地は平面なので、立体的な人間の身体にフィットさせるために生地の“クセ”を取っていくのですが、平均的には2キロ、時は5キロの大きなアイロンで平らな生地を身体の部分に合わせて、伸ばしたり、いせ込んだりして身体の線に沿わせていきこの裁断の工程はようやく終わりを迎えます。

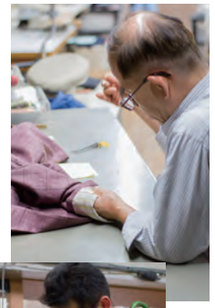
## 4 平面の生地を立体的な人間の身体にフィットさせる

パーツごとにカットされた生地は次に“縫製”の工程に入っていきます。工房を見た事ある方なら分かると思うのですが、裁断の段階だとパーツがバラバラで何を作っているのか全然分からなかったものが、ようやくスーツの形をしてくる。それがこの縫製の工程になります。

耐久性に優れいつまでも型崩れしにくいスーツに仕上がるのかどうか決まるのはこの縫製工程で行われる“芯据え”です。スーツは表の生地だけで出来ているわけではありません。表地と裏地、そして表からは見えない“芯地”で出来上がっているんです。人間でいえば言わば“心臓”にあたるこの芯地。この芯地の良し悪しがスーツの完成度を左右すると言っても過言ではありません。

獣毛で出来た芯に、バス芯と言って馬の毛を使った張りのある芯と胸の部分に弾力を持たすためにフェルト芯を縫い合わせたものを“毛芯”と呼ぶのですが、この毛芯と表生地を1枚の布のように合わせて止めていきます。そして肩や裾、袖、アームホールなどを表地と裏地がなじむように、手作業でまつり付けていきます。平面である布を立体的な人間の身体を丸く包み込み、襟からラペルにかけて流れるようなカーブを描くために、何回も何回もアイロンをかけながら縫製作業を進めていきます。

傍から見れば気の遠くなるような作業が何時間も続きます。中でもシルエットと着心地を決定づける肩のシルエット作りやスーツの顔でもある襟付けの部分は特に慎重に行われます。



## 5 最終仕上げも念入りに

こうして縫製が仕上がった段階で終わりではありません、最終工程である“仕上げ”の工程に入ります。全てのスーツを同じように仕上げていく訳ではありません、最終仕上げは個々の素材に適したプレス条件で、プレス機により最後の仕上げを行います。

そして、最終手アイロンにより立体感のある美しいシルエットのスーツが完成します。